

# 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）

## PD 募集

### 募集要項

東京大学大学院総合文化研究科「共生のための国際哲学研究センター」（UTCP）は、上廣共生哲学寄付研究部門\*特任研究員（PD）を募集いたします。今回の募集は、本年度より開始する3つの長期プロジェクト（L プロジェクト）「東西哲学の実践的対話」「共生のための障害の哲学」「共生の政治国際会議」に所属するPDを対象にしています。上記3つのプロジェクトの詳細については、下記の《プロジェクトの概要》をご覧ください。

\*上廣共生哲学寄付研究部門は、上廣倫理財団の寄付により設置されるものです。

なお、2012年4月17日（火）15:00～16:00に説明会を行いますので、関心のある学生は東京大学駒場キャンパス101号館2階の研修室（階段を上がって正面の部屋）にお集まりください。

#### 1 採用予定数

若干名

#### 2 応募資格（2012年4月1日現在の身分）

- (1) 大学院博士課程を修了または単位取得退学している者。
- (2) 3つのプロジェクト（「東西哲学の実践的対話」「共生のための障害の哲学」「共生の政治国際会議」）のいずれかにおいて共同の研究活動を志す者。
- (3) 外国語（特に英語）の能力が高く、国際的な研究交流に積極的に参加する意志のある者。

#### 3 任期・給与・勤務条件

2012年6月1日（予定）より10カ月間（次年度以降、継続採用の可能性もあり）  
時給1,500円～2,000円（経歴等により決定する）、週10～15時間程度の勤務とする（採用予定者の都合や研究業務の内容を考慮して決定する）

#### 4 応募方法

採用を希望する者は以下の書類をUTCP事務局に提出すること。書式は自由。

- (1) 履歴書
- (2) 志望理由書（A4で1枚程度。参加希望のプロジェクト名を明記し、そのプロジェクトとの関連で自分の研究を位置づけること）
- (3) 業績一覧表

\*提出書類は原則として返却しません。

#### 5 申込期日

2012年4月27日（金）18:00（必着）

#### 6 採用方法

書類審査ののち面接により採用者を決定します。

※書類審査に通った方には5月8日（火）14:40以降に面接を予定しています（一人20分程度）。

正確な時間に関しては、該当者に後日連絡します。都合の悪い方は相談に応じます（なお面接のための旅費は支給しません）。

#### 7 応募書類送付先及び問合せ先

東京大学「共生のための国際哲学研究センター」（UTCP）

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1 101号館2階

adm@utcp.c.u-tokyo.ac.jp

http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/

## 《プロジェクト概要》

### L1「東西哲学の対話的实践——文化横断的な研究協力および若手研究者養成」

---

プロジェクトコーディネーター：梶谷真司、中島隆博

#### 概要：

本プロジェクトでは、とくに東洋哲学と西洋哲学の対話を通して、この多極化、多元化する世界で起こる様々な問題に向き合い、そこにいかなる思想的・実践的可能性があるのかを国際的な協力のもとで探求していく。また、ここでは若手研究者を養成しつつ、文化横断的に世代間の対話も進め、探求に取り込んでいく。

そのさいとくに、近代 - 伝統と、西洋 - 東洋という対立軸の重なりとずれに着目する。今日、医療、環境、教育、倫理など、多くの領域で危機が叫ばれる。そこではしばしば近代的なものが批判され、伝統的なものが対置される。しかも日本を含め、東洋（および非西洋地域）では、近代化が歴史的に西洋化として起きたため、それは西洋的なものと日本的なもの・東洋的なものの対立という構図で捉えられる。そしてこうした危機・衝突の克服として、伝統への回帰が唱えられるが、それはしばしば日本的なもの・東洋的なものの復権への志向として現れる。けれども、近代と伝統という対立は、西洋内部にも存在しているし、他方で、近代化のあり方も、西洋と東洋で様相を異にしている。しかも、伝統的なものにせよ、日本的・東洋的なものにせよ、実際にはこうした対立の中で初めて発見されたり、場合によっては新たに生み出されたものが多い。そうすると、伝統的なもの、日本的なもの、東洋的なものが、そもそも何なのか。一般にそうした名称で呼ばれているものは、本当にそのようなものなのか。それらは本当に現代の危機や問題を克服するための、確かな拠り所になりうるのか——こうした問いに関して、これまでは十分な検討がなされていない。伝統的なもの、日本的なもの、東洋的なものについて、その成立の背景やプロセスの分析も含め、あらためて批判的・多角的な考察を要する。

本研究プロジェクトでは、このような観点から、近代と伝統、西洋と日本／東洋を今一度問い直す。これを日本のみならず、他の東洋／非西洋の視点から、さらには、西洋の視点から、国際的な研究協力のもとに推進する。そしてここに、次世代を担う様々な文化背景をもつ若手研究者の養成を組み込んでいく。

### L2「共生のための障害の哲学」

---

プロジェクトコーディネーター：石原孝二

#### 概要：

日本をはじめとする先進国では、急速に高齢化が進み、認知症など、様々な障害をもつ人々の割合はかつてに比べて大幅に増えている。また、発達障害や精神障害に対するとらえ方が大きく変わり、障害者の外延は大きく広がっている。こうした社会的な変化や、1970年代以降の当事者運動や障害学の成果により、障害者は、社会から排除されるもの、専門家による治療やケアの対象という存在から、社会の中でともに生活し、お互いに支え合う存在として捉えなおされつつある。しかしこのようなとらえ方の変化にも関わらず、障害に関する誤解や偏見も根強い。このような誤解・偏見を避け、また共生社会にふさわしい仕方で障害者に接していくためには、障害そのものの概念を問い直す哲学的な作業が必要となる。本プロジェクトは、障害当事者との連携、海外の研究者および神経科学等の分野における自然科学系の研究者との共同研究などを通して、障害者と健常者の間の共生社会を築くための哲学を展開していくことを目的としている。

このような目的を達成するため、本プロジェクトでは、4つの具体的な研究項目を設定する。第一の研究項目は、「障害概念と当事者性の哲学的検討」である。この研究項目は、本プロジェクトの核となるもので、他の研究項目の成果を踏まえながら、研究を進めていく。第二の研究項目「自然科学的研究・人文社会科学の成果を踏まえた障害概念の研究」においては、神経科学などによる最新の研究成果や社会学などの障害研究の蓄積を踏まえながら、障害概念の哲学的検討を進める。

第三の研究項目「障害の哲学と他分野の協働」では哲学的検討の成果を自然科学的研究や人文社会科学の研究に導入することを試みる。第四の研究項目「心と身体に関する哲学的研究」においては、障害の哲学に関する本プロジェクトの研究成果を哲学的研究に導入することを試みる。

本プロジェクトはこのように、共生のための障害の哲学を展開することを目的とすると同時に、哲学者と障害当事者、他分野の研究者との共同作業を展開し、哲学そのものの共生のあり方を示していくことをも示すものである。

### L3「共生の政治国際会議」

---

プロジェクトコーディネーター：中島隆博、石井剛

#### 概要：

共生の政治がいま問われなければならないのだということ、これは共生の哲学を展開してきた UTCP の活動が到達したひとつの結論である。

そこで本研究教育プロジェクトでは、ICCT（批評理論のための国際センター）という国際コンソーシアム（北京大学、ニューヨーク大学、華東師範大学、延世大学）の枠組みを中心として、グローバル資本主義の時代における共生のための比較政治論を展開する。ICCT はハイレベルな研究交流と人材育成を促進させるための国際的ネットワークである。多言語性・多文化性を旗印に文芸批評、文化批評、社会思想にかんする国際的協力体制を整備し、研究を推進する。

本研究教育プロジェクトにとって、ひとつ手がかりになるのが中国思想からのアプローチである。近年、中国語圏の思想界（中国大陸以外にも、香港や台湾、シンガポールなどの中華圏や、欧米の華人ネットワーク、さらには中国語で発言する非中国語母語話者の思想も含む）では、儒学を中心とする伝統思想に対する関心がたいへん高まっている。そこで論じられている主要テーマとして現代社会における倫理があるが、政治との距離の取り方においていくつかのタイプがある。それらを検討しながら、中国思想から共生のための倫理学をどのように構築するか、共生の政治がいかに可能であるかを考察する。

本研究教育プロジェクトにおける人材育成もまた知が生み出される現場に立ち会うことによってなされる新しい教育を標榜する。ICCT の人材育成の目標は「ヒューマニティーズ特有の思考法のトレーニングを通じて、文芸・文化・社会について批判的に理論化することができる若手研究者を育成すること」である。さらに最終的な目標として「文芸・文化・社会を分析するスキルを十分にもち、独自の価値を表出できる若い研究者が文化や教育にかんする政策決定プロセスに参加するようになること」を掲げている。本研究教育プロジェクトはこした ICCT の人材育成方法と人材育成ネットワークのリソースを最大限活用しながら、それを「共生の政治」についての思索へとシフトさせ、実践的な若手教育を実現させる。